

---

# ANOTHER

零龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ANOTHER

### 【Nコード】

N6857H

### 【作者名】

雫龍

### 【あらすじ】

普通の中三だった黒森真。ある日ゲームの中にしか出てくるはずのないポケモンを目撃して…

## 序章

ANOTHER

### 序章

毎週日曜日、僕、黒森真は バスケットをするために公園に行く。  
今は、その帰りだった。

「あれからもう二年たつのか・・・」

僕が中学一年になってから約二年、いつもこの公園で一人、練習をしている。中学になって、部活はバスケット部に入部した。走るのは他校の人から神速と呼ばれるほど速いけどなかなか技術の方は成長しない。陸上部の方が絶対活躍できると周りの人は言う。だけど、好きなバスケットは絶対やめたくない。

「早く帰らないと」

いつもは、五時に帰るけど、今日は三十分も過ぎている。

そうだ、あの道を通るか

僕は公園の近くの小さな林を通ることにした。少し暗いからいつもは使わない道だけど、あそこを通れば十分もかからない。すぐに帰り着く。決めたらすぐにその林へと向かった。

林の中は前とおった時よりも暗く感じた。

お化けが出てきそうだな

そう思うくらい今日は暗い。前に通った時はもう少し明るかった気がする。ま、いいかそんなこと気にしなくても。それより今はあ

さつてのテストの方が大切だ。それをわかっていながら練習に来たんだから僕は馬鹿だ。家に帰ったら絶対怒られるだろう。

「怒られるのは嫌だなあ」

そう思っていた時だった。

「何してんだよこの馬鹿」

急に近くから大声が聞こえた。まさかケンカだったりして。声が聞こえた方に行ってみた。少し遠くの木（太い木）に隠れて聞いてみた。しかし相手の姿は他の木のせいで見えない。

「お前はいつも失敗ばかりするんだから。少しは反省しろ」

少し高めの男の声だった。相方がいて、そいつに怒っているみたいだ。

「レポートに失敗するなんて恥ずかしいです」

「まったくだ。『スリープ』にできて当たり前の技だからね」

今、変な会話をきいたかもしれない。確か『スリープ』はポケモンのゲームにでてくるキャラクターだ。そいつら二匹のうち一匹がレポートを失敗したとか言っているのだ。子供の声ならただの遊びだろうと思う。大人がこんなことをしゃべっているのかと思うと笑いがこみ上げてきた。あきらかに声は大人の声だ。気になってもう少し近づくことにした。そう思って移動しようとしたとき、急に動けなくなった。

「君、僕たちの話を聞いていたね」

もう一人、仲間がいたようだ。その声の主は目の前に現れた。思わず息をのんだ。そしてさっきの笑いはどこかへ消えて行った。

## 『ユンゲラー』

ありえない。絶対にありえない。目の前にポケモンがいるなんて。そして、さっき話していた二人もでてきた。その二人（おそらく二匹）も、もちろんポケモンのスリープだった。きつとこいつらはお化けに違いない。いや、お化けの存在もポケモンの存在も認めない。

「まったく、お前らは人間一人にも気づけねーのか！この馬鹿野郎！」

「本当にごめんなさい兄貴！」

どうやら三人組らしい。自分がスリープでリーダーがユンゲラーらしい。とにかく今自分はものすごくいけないことをしたらしい。逃げようにも体が金縛りのような状態で動けない。

「おい、その人間。お前を逃がすわけにはいかないだが、どうしてほしい？」

ユンゲラーが聞いてきた。

「普通に家に帰らせろ！」

思わず怒鳴った。

「やだね。後でまた答えは聞こう」

それだけ言っと、また三人組で話はじめた。しかし、何を言っているのか分からなかった。

（いまならあいつらは油断している、今しかない！）

そう思うと、金縛りになっている体を無理やり動かした。そして、近くに落としていたバスケットボールを拾うと力いっぱい投げつけた。

「グエツ！！！！」

運良くスリープ二匹にぶつかってひるんだ。その隙に走って逃げた。

「くそ、待ちやがれ！」

僕はとにかく走った。三匹は走るのは苦手らしい。あつという間に見えなくなった。それでも走る。とにかく走る。十分も経たないうちになんとか家にたどり着いた。いったいさっきの三匹は何者だろうか。

## パレルワールド（前書き）

偶然ポケモンを見てしまった黒森真、  
いったいどうなるのか？

## パラレルワールド

僕は明日テストがあるのにもかかわらずベッドで横になった。しかしさっきの事が頭から離れずぜんぜん眠れない。

「さっきのやつらは・・・」

あの妙な三人組みは僕に何かをしようとしていた。見てはいけない物を見てしまったようだ。

「アー、もう頭いてー」

本当に頭が痛くなる。僕は何も悪いことはしていないのだ。いったいどうしてあいつらは俺を狙ってきた？

「誰か教えてくれー」

そういつた時だった。何か一瞬、風のようなものが吹いた気がした。

「んっ？」

窓が開いていた。さっき閉めたはずなのに。僕は窓を閉めようと窓の前に立った。この瞬間僕は驚いた。

「動いてない？」

散歩をする人も、車も、鳥も、雲も、全部動いてない。動いていないだけならまだいいが、鳥なんか空中で静止している。今僕はありえない物を目にしている。

「何で動いてないの？どうして！」  
思わず叫んだ。

「そんなに知りたいなら教えてあげるわ」

聞き覚えのない声だ。振り向くとなんとそこにいるのは『ユキメノコ』だった。

「何をし・・・」

何をした、というつもりだったが、さっきの連中らと同じように

金縛りのような状態にされた。だが少し感じがさつきよりも違った。  
「あなたは見てはいけない物を見てしまった。だからあなたをこの世界から消さなければいけない・・・」

（ちよつとまてよ、僕を殺す気か？僕が何をしたって言うんだよ！）  
しゃべれない分、心の中で言った。

「だけど私はあなたを殺したくなんかない。だけどあの人に私は逆らえない」

泣きながら話している。目の前のユキメノコは泣いている。僕はどうすればいいのだろうか。

「もしあなたがこれを信じてくれるのなら・・・」

そう言つと僕の周りを霧のようなものが包み部屋から場所が変わった。金縛りも消えた。

「ここは？」

見る限り真つ白の世界だった。

「ここはこの世界の南極大陸」

え、この世界の？

「どういうことですか？」

「私はパラレルワールドから来たの」

ますます分からなくなってきた。

「パラレルワールドって何ですか？」

「簡単に言つとこの世界とは違う次元の世界のこと。簡単に言つともうひとつの地球があるように考えればいい」

こんなものがこの世界にも存在していたのか。て、そう簡単に納得できない、と言いたいけど目の前に本当のポケモンがいるとその存在を否定できない。

「もう時間がない。この場所を絶対に覚えていてね」

「そんな、もうないのまだ聞きたいことが・・・」

そう言いきる前に霧のようなものがまた体を包んだ。

「何をし・・・」

言葉が出ない。

「がんばってね…」

悲しげな声が聞こえた。そしてあたりがいつきに暗くなった。

「グウアー……」

急に胸が苦しくなり胸を抑えた。そこで僕の記憶は途絶えた。

「う……」

朝の日の光をつけて目を覚ました。

「イタタタ……」

痛む体を無理やり起こした。そして僕はある異変に気づいた。

「え……これが……自分？」

見渡す限り自分の体は人間の物ではなく怪物の物だった。

「まさか！」

そう思った。そう思ったかった。でも今の僕にはそれは無理だった。周りに破けた服、体の色は緑色、腹はピンク、そして手首から生えている細長い板のようなもの、何一つとして人間らしい部分はなかった。

「いったいどうすれば……」

そして周りを見た。

「ウソだろ……」

自分に起きた変化で頭がいつぱいで回りのことを全然気にしていなかった。今自分は森の中にいた。

「次から次に、いったいここはどこ、そして僕はどうなったの？」

考えれば考えるほど分からなくなる。これがあのユキメノコが言っていたパラレルワールドのことなのだろうか後、あの時言っていた南極大陸って何？正直この先何が起こるかなんて分からないから不安だ。持ち物は一切持っていない。

「いや待てよ……」

破けた服のズボンに手をつ突っ込んでみた。すると何か手ごたえがあ

った。

「なぜこんなものが？」

入っていたのは愛用のリストバンドだった。どうしてこんなものが入っているのだろうか。

「でもなんか安心するな……」

これをつけているだけで心が落ち着いた。自分がどうしてここに連れて来られたのか知らないから不安だ。自分に起こったことさえも分からないならなおさらだ。だけど考えこんだ所でどうしようもない。とにかく進もう。

おそらく数時間後

「いったいどれだけ歩いたんだ？」

歩いても、歩いても、周りは木、木、木。風景は変わらない。時計はないけど、太陽は真上に来ているからおそらくかなりの時間がたっているのだろう。さすがにこの怪物の体も疲れてきた。どこかに休めそうな場所は、と思うけど、そのような場所はまったくない。右手のリストバンドで汗をぬぐいながら歩いていた。さっきから思っていたけど、相当この地域は気温が高いらしい。喉も渴いてきた。

「本当にこのまま進んで大丈夫かな……」

そうつぶやいた時だった。川の流れる音が聞こえた。その音がする方へ行ってみるとそこはやはり川だった。食べ物どころか水さえも飲んでいなかったから本当にオアシスだ。この川はみた感じ水はきれいそうだ。

「ひとまずここで休もう」

そして川の水を飲もうと川をのぞきこんだ。

「そんな……」

自分が人間でないのはもう分かっている。でも自分の顔を見て驚いた。

## 『ジュプトル』

怪物は怪物でもポケモンのジュプトルになっていた。自分を見るなりなぜか笑ってしまった。残りの人生をゲームのキャラクターとして暮らす。それもいいか。どんなもの食べればいいのかな。ただど虫だけは嫌だな……。そんなことを考えながら一步を踏み出した。

「うわ！」

ぼーっとしてたせいで川の方に足を突っ込んで、そのまま水のなかへ顔から突っ込んでしまった。

「げほっ、げほっ！」

鼻に大量の水が入ってしまった。それだけでなく、体全身ずぶ濡れだった。

（最悪だ・・・）

そう思った時だった。

ゴゴゴゴ・・・

水の激しく流れる音がした。さらに川の流れが急に早くなってきた。

（まさか・・・）

嫌な予感がして急いで川から離れようとした。その時だった。目の前から大きな波が襲い掛かってきた。

「わわわわわ」

急いで離れようとしたけど足が恐怖のせいでなかなか言うこと聞かない。もう波は目の前だった。

「どわー！」

その波に飲まれてしまった。波の威力は想像以上に強く、身長が小さく、人間の体でないせいで上手く泳げない。ましてやこんな山

のなかに助けしてくれるような人もいないだろう。

「くっ」

突然の出来事だった。いきなり洪水に襲われるなんて想像もつかなかった。どうにかしたくても全くできない。そのまま僕はどこかに流されていくだけだった。

## パラレルワールド（後書き）

時間がかかってすみません。

はじめまして雲龍です。

この小説、読んでくれたことをとてもうれしく思います。駆け出し  
なばかりの僕ですが、応援よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6857h/>

---

A N O T H E R

2010年10月12日02時54分発行